

道德の完成

2022. 11. 9

ベンジャミン・フランクリンは、自分が考えた「13の徳目」を実践するために、まず、週ごとに1徳目を配当した。そして、全体進度を点数化して毎日確認しつつ、13週で一巡させた。徳目数の13は、1年52週を4分した数である。フランクリンは自伝に以下のことを記している。

私は、これらの徳すべてを習慣として身につけようと考えた。同時にすべてを身につけようとすると注意があちこちに散ってしまうので、一定の期間に一つの徳に集中し、それが身につくと次に移り、これを続けることで13の徳を身につけていくことにした。

最初の1週間は、「節制」について厳しく注意するように心がけ、その他の徳についてはなるべく任せて、ただ毎日、夜にその日に犯した節制に関する過ちだけをチェックして手帳に書き込むようにした。

このようにして、次の週には、「沈黙」を行い、その次には次の徳を行うようにしていくと、13週で完全に一巡し、1年に4回繰り返すことができる。

13という数字に対する疑問は消えた。では、なぜ節制、沈黙、規律・・・という順序なのか。節制は、他項目の習得の基礎となると考えた。これができれば、次の沈黙や規律に進みやすくなる。それがその次の決断につながる。道徳的価値の序列よりも習得しやすい学修プログラムとなっている。では、このような努力を続けたフランクリンはどうなったのか。自伝には、次のことが記されている。

しかし全体的に見ると、私はやろうと願った道德の完成まではとても達せず、その近くに至ることもできなかったが、それでも努力することによって何もやらなかった場合に比べて、人間もよくなったし幸せにもなれたのである。

この文章を書いている数え年で79歳になる今まで、私がずっとたいへん幸福であったのは、神の恵みの他に、このちょっとした工夫をしてきたためであることをわが子孫に伝えておきたい。

とてもとてもフランクリンの真似はできないし、やろうとも思わない。だが、多くの人は何かしら心にとめて何らかの方法で努力をしているものである。名言記録ノート（名言手帳）をめくったら、最も実践困難だが、最もわかりやすい実践方法に目がいった。そして、自らの努力不足を省み、再び人間修行のスイッチを押すこととなった。

ベンジャミン・フランクリンはアメリカ100ドル紙幣に、その肖像が描かれている人物である。84年の生涯であったが、その葬儀は国葬であった。